



「大阪ふるさと暮らし情報センター」の開設を記念して、去る6月20日に行われたシンポジウム。出席者として、西日本の自治体の中でも「田舎暮らし」に積極的に力を入れている鳥取県と和歌山県の知事をお招きした。ここでは、おもに「ふるさと暮らし」に関する話題に絞ってシンポジウムの話を抜粋したものをお届けする。

田舎暮らしにやさしい鳥取県と和歌山県

高橋 今日はたくさん集まっていたいて、臨場感あふれる感じです。まず、それぞれの知事さんからご自分の県のふるさと回帰についての紹介や自慢話をしていただきたいと思っています。

平井 鳥取県というところ、ずいぶん遠いところだと思われるかもしれませんが、実は今日、私は車でやってきました。鳥取県を出たのが12時過ぎぐらいで、3時には着いてしまいましたから、ずいぶん早くなりました。

鳥取県はボランティアの参加率が非常に高いのが特徴です。大阪は20%ぐらいですが、鳥取県は34・5%の方がボランティアに参加して全国第1位になっています。鳥取砂丘の除草とか地域の見守り活動などいろいろなボランティアがあります。

「住む」ということについて説明させていただきたいと思います。鳥取県では一戸



立松和平当センター理事長による記念講演

建てのマイホームは当たり前ですし一戸建ての率も非常に高いです。マンションよりも一戸建てのほうが多く、1住宅あたり130平米弱、だいたい6部屋ぐらいが平均で、200平米、300平米の住宅もざらにあります。

また子育て環境も整っています。出産年齢の女性10万人あたりの産婦人科の医師の数は全国で一番多く、周産期医療システムも整備していますし、出産の費用も平均37万円と、全国平均に比べると安いのです。

15歳未満の児童10万人あたりの小児科医の数も全国2位です。県の人口が少なく、逆にこういうメリットがあるのではないかと思います。鳥取県に来ていただいた方からも「医療は便利にいきといていて、すぐにかかれる」という話をよく聞きます。0歳児・5歳児10万人当りの保育所の数は全国で5番目で、待機児童はゼロです。子育て世帯向けの保育料の助成もあります。「子育て応援バスポート」というサー

大阪ふるさと暮らし情報センター 開設記念シンポジウム開催!!



ビスもしています。大阪、兵庫でも同じような子育て応援の事業をやっていますが、相互乗り入れを始めたので鳥取県でも通用するようになりました。

それから最近、「森のようちえん」を始められました。これはヨーロッパあたりで始まったもので、園舎がなくて森の中で遊ばせる幼稚園です。「これが本当の子育てじゃないか」ということで、休想用に入る建物がありますが、普段は外で過ごしています。

それから校庭の芝生化を進めています。サッカーのトルシエ監督とか川口チエアマンに褒めいただき、先日モリス瑠偉さんが来られて驚いておられました。「鳥取方式」と呼ばれる芝の植え方で、通常よりもずいぶん低コストで出来ます。就職先も食品加工とか、電機関係とか、いろいろな企業があります。

大阪から来られてペンションを始めたとか、パン屋さんを始めたという方も多いですが、環境が良いので、いろいろな生業の可能性があると思います。特に農林水産業のお話をさせていただくと、林業では、森林組合に入る方も結構多くて、この間も大阪から5、6名まとまって森林組合に入られました。漁業を志す方もおられます。先日聞いた松葉ガニはひとりで1000万円ぐらいのお金になるそうです。ご自身の適性も考えてご相談いただければと思います。

また、農業については、このたび就業希望者の方にトライアル雇用ということで2カ月の研修をして、その後本格的な研修を経て就業していただく研修事業を新たに

創設しました。県の農業開発公社で月額約11万円の給料、住宅手当3万3000円、さらに2万円の赴任手当の支給など、きめ細かい研修制度をつくりましたので、ぜひご相談ください。

お試しの住宅としては、1泊1000円で利用できる一軒家があります。まずは鳥取県を見ていただいて、周りの雰囲気を感じながら、いろいろな人と話して、移住定住を検討してもらうことが大切ではないかと思っています。是非「鳥取県移住定住サポートセンター」へお電話をください。0120-841-558（やさしい、こは）です。

高橋 田舎暮らしの選び方にはポイントがあります。それは何かというと、一つは受け入れ態勢がしっかりしていることがすごく大事です。移住しても、受け入れがないとなかなか地域になじめない。それで断念して戻ってくるケースが多いんですが、受け皿がしっかりしているところは田舎へ移住してもうまくなじめます。

仁坂 和歌山でやっている「田舎暮らし応援」というのは、田舎暮らし推進市町村になった地域の地元の方々が受け入れ組織をつくって、自分たち、来ていただいた人これから来ていただくであろう人たちがみんな仲良く話し合いをしながら、新しい人たちを定着させていこうというシステムです。

田舎暮らしは、地元の流儀に合わせてもらわないと困るというところが非常に多いと思います。一方新しく来られた人は、そんなことをいってもどうしたら合わせられるのかとか、自分はこんないものを持つ

ているけれども、それをちゃんと評価してくれるのかというところがあると思います。それをよく話し合って、両方かなうと思ったらその人に定着してもらえばいいし、いまいちだと思ったらやめてもらえばいい。だから数は少ないけれども、大変定着率がいいというのが和歌山の田舎暮らしのモデルです。

ただ、特に農業は一朝一夕にはできませんから、本当に田舎暮らしのモデルになりそうな古座川町というところに県が「ふるさと定住センター」を持っています。立松さんがおっしゃっていた、ユズをつくっている集落のある町です。こはふるさと回帰支援センターが運営して、新しく来たいという人たちに「田舎暮らしではこういうスキルを持っていないといけない」ということを研修しています。

本格的に農業をしたいという人たちにとっては新規就農という問題になります。和歌山県は御坊市に就農支援センターを持っています。いろいろなコースがあって、和歌山県がかなり費用を負担して訓練しています。少しレベルが上がってきたら農業大学校です。これは各県にあると思いますが、訓練期間は8カ月で、一人前あるいはそれ以上の農家になっていただくことを一生懸命やっています。農業大学校に入りたいという人は近年は減っていました。が、ここ2年ぐらいで急速に増え始めました。農業大学校に入って農業を勉強しようという機運が日本中に高まっているように思います。

では、どんな方々が移住されたかということです。外から移住された方々はそれぞ

高橋 公（認定NPO法人ふるさと回帰支援センター常務理事・事務局長）



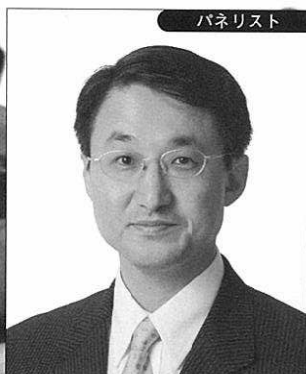
コーディネーター

立松和平（認定NPO法人ふるさと回帰支援センター理事長）



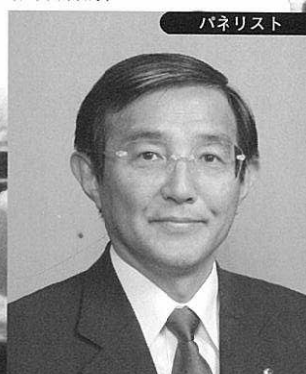
コメンテーター

平井伸治（鳥取県知事）



パネリスト

仁坂吉伸（和歌山県知事）



パネリスト

れのスキル、いいところを生かして、もともと和歌山県にいる人たちからも知識を借りるけれども自分の知識も伝播して、一緒にその地域を高めているというのが和歌山のいいところではないかと思っています。

和歌山県はタワシやホウキの大名産地でしたが、ほとんどなくなってしまいました。これは伝統的な技法で、たとえば京都の料亭で使うホウキはまだ需要があります。つくる人が高齢化していますが、他県からある女性がお見えになって、先生に気に入られて、いまや唯一の継承者になりつつあります。まだ20代です。

それから、和歌山はいま有効求人倍率が近畿のトップで、全国では5位ぐらいです。もちろん和歌山もあまり数字は良くありませんが、好況の中で都会にいい人を取られていたのが、この不況の中で、もう一度自分の人生を和歌山でやり直すということもあります。

わが和歌山県の企業は立派なものがたくさんありますが、小ぶりでなかなか目を向けてもらえないので、「この際和歌山で働きませんか」ということで、みんなで集まって県のホームページで宣伝しています。去年の12月ぐらいから始めて、現在までに85人の採用が決まりました。これは必ずしも田舎だけではなくて、和歌山市の真ん中もありますが、そういうところで「和歌山はどうだ」という話をしています。「和歌山で農業をしませんか」というのは、いま50の枠でやっていて、もう22が決まっています。これも同じようなスキームです。ただ企業は雇った人を一人前に仕込みますが、農業はほとんどが自営農です。し

たがって「働きませんか」「はい、働きます」といっても、収入は1年に1回、収穫期しかありません。その間に自分のスキルを磨かないといけないし、収穫はないし、「働きませんか」といっても働けないわけです。そこで、補助金を出しています。それは農業普及員のところで養成する試みです。いま申し込みが40人ぐらいあって、20人はすでに働く場所や土地を借りることが決まっていますが、これをもっと増やそうと思っています。

あとは全国どこでもそうだと思いますが、福祉・医療系の仕事についてはまだ人手不足です。条件の悪いところが多いので、これも一部補助金を出して、福祉施設・医療機関の544施設が「来てくれませんか」ということで、良かったらそういうところへ行ってもらうというものです。

田舎暮らしの成功の秘訣は地元の受け皿がしっかりしていること

立松 和歌山がいいか、鳥取がいいかという、甲乙つけがたいところです。これは全方位外交をしている理事長としてのコメントですが(笑)、僕はどちらもいいと思っています。先日、農協が二十世紀梨の祭りをやっていましたが、人が多くてびっくりました。あの梨はおいしくて鳥取県が有名にしましたが、本当は千葉県でできたものなんですね。梨を捨てたらごみだから芽が出てきて、それを鳥取県の人を持つていつて、あれだけのものにしたという事です。和歌山の古座川町のユズも若い女の子が名産をつくらうと、そこに住み

着いて本当に一生懸命やっています。僕はそれにほだされて、その年のお歳暮は古座川町のユズを詰め合わせて送りました。

高橋 田舎暮らしというのは楽しみ方です。先ほど言ったように、成功する一番のポイントは受け皿ができていくかどうかということです。もう一つは、何をするために田舎暮らしをするのか、どういう暮らしをするか、どこで、だれと、何をして暮らすかということが非常に大事で、このことがしっかり整理されないと行ってもなかなかうまくいきません。そういう点で和歌山で暮らすのか、鳥取で暮らすのかというのも、自分自身がどういう暮らしをするかということになります。

気候風土のひだが深い日本は、多様な特徴を選んで生活ができる

平井 立松先生のお話を聞いていてふと思ったんですが、和歌山県でも鳥取県でも神様が隣にいます。鳥取県には大山、和歌山県には那智があります。共通するのは神聖な山だということです。大山は、地元では出雲の風土記の昔から「神います山」と言われています。だから人があまり入らなくて、広大な自然が広がっています。山はもとと修験の場所、年に一度しか入れませんでした。時代が移り変わり、登山が解禁になったものですから山頂が荒れたんですね。

それでわれわれは、山登りをする人は山を愛する人、自然を愛する人だと考え、その人たちに「木や石を持って山に上がろう」というボランティアをお願いしまし

た。「一本一石」運動と呼んでいます。いまでは大山キャラボクという大山特有の木が山頂にもすくく広がっています。

ところで、鳥取県でも農林水産業の就業を募集したところ、198人の応募がありました。ちょっと前には考えられなかったことです。だいたい世の中の価値観が変わってきて、あくせくした都会の暮らしよりは、自然と向き合って、自分の大切なものを家族と共有しながら、友人をつくりながらやっていこうというふうになってきたんじゃないかと思っています。

仁坂 田舎暮らしを支援する地域は、それぞれの方が持つておられるいろいろな力量とか経験を歓迎します。逆に田舎にはゆつくりとした生活とか、林業、農業を中心とする村の暮らしがあるので、そういう暮らしをしながらあなたが持つている何かをもらって、それをみんなで尊重しますというのが和歌山モデルのいいところだと思います。

先ほどは田舎暮らしの本当の田舎のところを申し上げました。成長率がギリになったり、いろいろあって、ちょっと前まで和歌山はどんな人が出ていつていました。が、その前はどちらかというとたくさん来てもらっていました。私は先祖伝来の県民ですが、私の学友のお父さん、お母さんには和歌山の言葉じゃない言葉をしゃべっている方がたくさんいました。

立松 和歌山も鳥取ももちろんいいんですが、僕は栃木の人間でしてね(笑)。大阪に来て自分のところを宣伝するのも変ですが、本当にいいところです。日本は南北に長いので気候風土のひだが深いというか、沖縄まで入れて地球儀で日本列島の幅を測

亀元信吾

大阪ふるさと暮らし情報
センター事務所長
より一言！

大阪ふるさと暮らし 情報センターが順調に業務展開

開設4ヵ月で着実に前進。
自治体の頑張りに期待したい

大阪ふるさと暮らし情報センターを開設して約4ヵ月。出展自治体が行うセミナーや相談会は、わたしの心配（人が集まるのか）をよそに定員を上回る順調な滑り出しをみせている。とくに、ふるさと定住をはたした経験者の体験談は、参加者には興味深く、多くの質問が寄せられる。「農業は難しくないか」「夫婦二人でどれぐらいの農業ができるのか」等々。また、やっぱり気になるのは、近所付き合いのようで、どう地域に溶け込んでいったか、地域コミュニティに関する質問が集中する。体験者からは、「あまり肩肘張らずにゆっくりと」など自身の経験を踏まえて、適切なアドバイスが行われ、セミナー終了後も懇談する姿があちこちでみられる。「各自治体の担当者よりも体験者」そんなニーズを今後のセミナーに各自治体は是非いかしてほしい。

よちよち歩きの当センターも、相談対応など各業務をマニュアル化するなど、着実に前進をしている。相談者のニーズに的確に対応できるセンターを目指したい。

2009年度 ふるさと暮らしセミナー開催日程

開催場所：大阪ふるさと暮らし情報センター

月	日（曜日）	開催者（日程は決まっているものだけを紹介しています）
8月	29日（土）	大和ハウス
9月	12日（土）	ふるさと回帰フェア2009 in 大阪
10月	3日（土）	UR都市機構（愛媛）
	17日（土）	福井県
	24日（土）	和歌山県（新宮市）
11月	13日（金）	岐阜県（高山市）
	14日（土）	和歌山県（那智勝浦町）
12月	12日（土）	和歌山県（古座川町）
	19日（土）	福井県
1月	23日（土）	和歌山県（紀美野町）
2月	20日（土）	和歌山県（田辺市）
3月	13日（土）	和歌山県



大阪ふるさと暮らし情報センターで行われたセミナーの様子

ると、ほとんど全ヨーロッパが入ってしまっています。北欧からアフリカのサハラぐらいまで行ってしまうので、僕はこういう風土を利用しない手はないと思います。それからもう一つは、自治体の窓口の方も親身に対応していただきたい。島根の話ですと、「何で島根なんですか？」と言ったら「電話に出てくれた窓口の人が一番親切だったからです」と言われました。担当者は優しく親身に対応していただきたいと思います。

田舎暮らし、ふるさと回帰というのは、それぞれにとってのふるさと探しです。私は福島県の出身ですが、東京にはふるさとのない人が結構多くいます。そういう人たちが、自分が老後に住むふるさとを探したいというときには、暖かいところ、寒いところ、海のそば、田園地帯と百人百様ですが、それでいいと思うんですね。そういう

た意味でもいくつかのところを訪ねて、自分に合ったふるさとを探するという面もあるだろうと思っています。時代は大変な状況になっています。明治維新以後に匹敵するぐらいの大転換期に来ているんじゃないかと思っています。政治もさることながら、一人ひとりの心の中で「日本人は、日本は、はたしてどこに行くんだろう」と考えたときに、新たにふるさとが、地方が、第1次産業がいま問われ始めているのだと思います。ここ1、2年は1億2000万の国民が、日本をどうしようか、日本のふるさとをどうしようか、食料事情をどうしようか、お米はどうなるんだろう、農業はどうなるんだろう、海はどうなるんだろう、山はどうなるんだろうと

考える時期ではないかと思っています。本当の豊かさとは一体何か。世界に冠たる経済大国になったにもかかわらず、年収200万円以下の人が1000万人もいる社会とは一体何なのか。しかし一方で地方に行けば、ふるさとに行けば、自然と向き合いながら豊かさが実感できる暮らしがあつて、「わがふるさとにどうですか」ということで全国各地が動き始めています。とりわけ今日来られた二つの県は、西日本ではチャンピオンです。知事自らが「わが県、わが町でどうですか」と言うのは大変なことですし、忙しい方であるにもかかわらず、こういうことをやってくれるのは、本当に期待が高いと思います。今日はありがとうございました。